

短編小説づくりへの挑戦

The Challenge to write the short stories

中 村 国 男

NAKAMURA Kunio

キーワード：短編小説、創作、学生

Keywords: short story, write, student

小説を書いた経験のほとんどない学生に短編小説を書かせたら、どれぐらい書けるのだろうか。また、指導を受けたらどれぐらい力は伸びるものだろうか。日本語日本文学科の「創作の心理」という授業は、まさにその実践研究の場である。この論文では平成 25 年度からの 5 年間の指導の結果を踏まえ、まず学生たちの意識や取組姿勢のデータを公開する。続いて私の指導方針と、それを踏まえた授業計画について説明する。次に、ある学生のいくつかのレポートを中心として、創作の苦手な学生の実情を紹介し、私がどのような具体的指導を施し、学生を成長させたかを述べる。これらを通して、学生たちの陥りやすい誤りや、その指導法を読者と共有できるようにしたい。

短編小説づくりへの挑戦

中村 国男

はじめに

自ら志して小説を書いてみた経験など皆無に近いという学生が、授業で「短編小説を書きなさい」と命じられたとする。いったいどんなものができあがるだろうか。また、始めの頃はおよそ小説とは程遠い代物しか書けなかったとしても、ある程度のノウハウを教わったとしたら、学生の創作力はどれほど伸びるものであろうか。

まさにこの実験と言ってもよいような授業が日本語日本文学科にある。「創作の心理」という授業である。平成二十五年度からの五年間は、私が担当してきた。一年生前期の選択科目であり、全員が受講するわけではない。第一回授業受講者は、この五年間で述べ百三十二名、最後まで受講した者は百二名。第一回の授業で、「毎回の授業の最後の三十分で、お題に沿った超短編小説を書く。次の授業の最初に、先生の採点・添削済の作品を班別に回覧する。それに耐えられる自信のない者は受講を辞退するように。」と宣言しているからである。それでも辞退者が五年間で三十名に留まっている点は、「短大生ながら天晴れ」と褒めてやりたいと私は考えている。受講者の中には、「毎年、市民文芸に応募して、入選したこともありませう」という「猛者」もたまにはいるのだが、その一方で、毎年二名から三名は、「これが日本語日本文学科を志した学生の文章と言えようか。」と、暗澹とした思いに駆られる作品を書いてくる

学生がいる。しかし、不思議なことに、こういう学生は辞退しない。そうなると、引き受けた以上は、これらの学生に達成感を持たせて十五回目の授業を終了することが私の職務となる。

この論文は、このタイプの学生をどう育ててきたかという実践の記録である。授業で課した「お題」に対して、ある学生がどんな作品を提出し、私がどう添削指導したかという内容が中心である。

なお、それに先だって、授業のテーマ、育成する学力等を、シラバスから一部引用するなどして、授業のイメージを持っていただきたい。

授業のテーマと育成する学力

主題

近代・現代の小説・随想・詩歌の名作・力作を読み、その描写手法を考察し、それを参考にして情景や心理を豊かに描く力を身に付ける。

授業の到達目標

1 名作のあらすじを追うだけでなく、優れた表現に感動できる心

- を育てる。(対象への関心の深化)
- 2 名作の表現への理解を自分自身の文章に活かそうという意欲を持つ。(成果を生活の中で活用)
- 3 自分とは異なる様々な人の立場になって、豊かな創作ができる。(新しいことへの挑戦力)

十五回の授業計画

一回目の授業は十五回の授業の全体像を示すとともに、各回の授業の流れを説明する。その後以下の資料2に示したように、多くの学生が高校二年時に学習している漱石の小説「こころ」の描写法を学習させ、超短編小説(以下、「レポート」と呼ぶ。)を提出させる。その「お題」については後述する。

十五回目の授業は、十四回授業で作成したレポートを返却、講評を述べた後、最終レポートの作成について説明し、作成に着手させる。これは一回目から一四回目で作成したレポートのうち、どれか一つを選んで、自分なりに設定を追加し、原稿用紙五枚から十枚の短編小説に改良するものである。時間内に完成させることは困難なので、授業終了時間が来た時点で宿題とする。提出期限は一週間程度の余裕を与える。

二回目から十四回目の授業の流れは次の通りである。

資料1 授業の基本的な流れ

- 1 30分間 レポート返却、講評、回覧、質疑応答
- 2 30分間 名作・力作に学ぶ(作家・作品は下記資料2)
- 3 30分間 お題に基づいたレポート作成

資料2 「名作・力作に学ぶ」で扱う作家・作品・内容

1	夏目 漱石	「こころ」 無生物主語、対句と反復 他
2	堀 辰雄	「風立ちぬ」 陽射しや雲の描写
3	川端 康成	「伊豆の踊子」「雪国」 雨や雪の描写
4	太宰 治	「畜犬談」 生き物(動物)の描写
5	正岡 子規	短歌十一首 「小園の記」 植物や虫の描写
6	夏目 漱石	「三四郎」「こころ」 家屋・室内の描写
7	北 杜夫	「どくとるマンボウ航海記」 海や港町の描写
8	芥川龍之介	「蜜柑」他 刻々と変化する心理の描写
9	遠藤 周作	「沈黙」「海と毒薬」 不安や嫌悪の心理描写
10	島崎 藤村	「破戒」他 望郷、憎悪、敵意の心理描写
11	さくらももこ	「さるのこしかけ」他 家族愛憎の心理描写
12	吉本ばなな	「キッチン」他 悲しみと癒しの心理描写
13	中島 敦	「牛人」他 服従と反抗の心理描写
14	新美 南吉	「嘘」 友情対立が交錯する少年の心理描写
15	授業の総括	ヒットする小説の要素 最終レポート作成

七回目の授業までは、風景、場の状況などの情景描写を学ばせる。これは主人公の状況・心情・台詞さえ描けば創作になるだろうという安易な私小説的手法に陥らせないためである。我々の日常生活を想像してみよう。同じ雨でも、ある人には無情の雨にもなれば、他の人には恵みの雨にもなる。一人の人物においても同じような降り方の雨が、その日の予定や心理状態によって異なって感じられるはずだ。ゆえに情景描写の学習は、単なる情景を描くスキルを磨くということではない。俳句や短歌のように、情景描写を通して登場人

物の直面している状況や心理を読者に伝えることができるということとを教えるのである。そして八回目以後の心理描写の学習につながっていることを、何度も意識させて授業を実施している。

八回目からの心理描写の学習においては、心理という目には見えないものを「説明する」のではなく、どのようにプロが「描写している」かに重点を置いて学習させている。例えば「彼女は悲しんだ」とは一言も書いてないのに、読者に彼女の悲しみがじわじわと伝わってくるのは、作者がどういう描写をしているからなのかを考えさせる。おのずと表情・動作、発言内容、口調などに注目させる授業になる。

学生たちの下地

第一回の授業時に、今年の学生たちの経験レベルや意欲を大づかみに把握するためアンケートを実施している。資料3は高校時代までの学校での創作体験を把握するもの。資料4は本学入学時点での創作に関する関心意欲を把握するためのものである。

資料3 随想や小説の創作体験 過去五年、百三十二名の回答

Q 小・中・高校の授業（夏休み等の課題も含む）で、随想・小説（読書感想文や意見文を除く）の創作体験をしましたか？

A 小学校19% 中学校16% 高校22%

随想を加えた影響もあり、高校での経験は私の予想を上回っている。

る。例えば「羅生門」のその後話のようなものも含めてよいと伝えたいことも影響したのであろう。随想を加えたのは、五回、七回、十回の授業で随想を扱うことが理由の一つ。随想が文章の伝達性よりも、読んだ味わいという情緒性を重視する点で小説の表現に近い面があるということが理由の二つ目である。

資料4 随想や小説を書くことへの抵抗感 過去三年、六十一名の回答

Q 随想や小説を書くことは……？

A とても好き21% ままあまり好き56%
あまり好きじゃない20% 嫌い2%

77%の学生が「好き」と回答したのは驚きである。それだけの学生が早熟な者は小学生時代から、遅い者でも高校時代から小説をいくつか書いているのである。ただし、詳しく聞いてみるとコンクール等に応募した経験のある者は少ない。大部分は文芸部で書いたとか、日記のようにつれづれなるままに書いて、誰にも見せずにしまいくんできた者である。問題は残る22%の学生の中で、辞退もせずこの授業を志願し続ける者をどう育成するかであろう。

育成する学力をノウハウとして示すと

P1の「主題」の項目に「情景や心理を豊かに描く力を身に付ける」と掲げた。

それは具体的にはどういう力なのか。一例を挙げれば「登場人物が置かれた状況をしっかりと絞り込んで、季節・天気・時間などがぶれることなく描写できる力」である。「時間帯が夜のはずなのに遠くの人物の表情をこちら側の人物が詳細にキャッチしてしまうなどといった、現実にはあり得ない描写をうっかりしないような力」と言えばお分かりいただけよう。

こういったノウハウは、「今日のノウハウカード」として毎回の授業で黒板に掲示する。二十九年度は資料5に示す十五枚のカードを掲示した。三回目の授業で③④を掲示した以外は、毎回一枚であった。何回目にもどのカードを掲示するかは、年ごとに少しずつ異なる。前回のレポート結果を見て、是非注意喚起しておかねばならない点と、本時に書かせるレポートのヒントを考えて選択する。ただし、年ごとに大幅に変わるわけではない。

⑮の「ラブ・アド・サス」が意味不明と受け取られるであろう。これは「ラブ・アドベンチャー・サスペンス」の意味である。

ラブは恋愛だけでなく、肉親の愛憎、友情、先生と生徒の人間関係、物への愛着などを含む。アドベンチャーは冒険だけでなく、交渉、戦い、和解、独立、成長なども含む。サスペンスは事件、恐怖、緊張の他、謎解き、不思議などを含む。この三要素は、劇作家の山崎正和氏の講演会で聞いたものだが、確かにヒット映画「タイタニック」や「千と千尋の神隠し」などを想起すると、この三要素が入っており、なるほどと頷ける。

資料5 「今日のノウハウカード」

① 状況を絞り込め 季節・天気・時間

- | | | |
|---|----------|----------|
| ② | 目線固定するな | 無生物主語も |
| ③ | 語り手は誰か | 私とは限らない |
| ④ | 時間を崩せ | 結果・山場・会話 |
| ⑤ | どう描写する | 説明・台詞・批評 |
| ⑥ | 人物になりきる | 性格・日常生活 |
| ⑦ | 結果だけ書くな | 原因・動機・過程 |
| ⑧ | 激しい喜怒哀楽 | 短い台詞・短文 |
| ⑨ | 活かせ会話と独白 | 自称・対称・語尾 |
| ⑩ | 脇役はスパイス | 味方・無関心・敵 |
| ⑪ | 書き出しと結び | 会話・独話・紹介 |
| ⑫ | 小道具を活かせ | 持ち物・身体にも |
| ⑬ | 心理は見えない | 人物の体外に |
| ⑭ | 勝負の決め台詞 | 短く・単語・無言 |

⑮ ヒット作三要素 ラブ・アド・サス

「名作・力作に学ぶ」とは

P2の資料1で授業の中盤の30分間は「名作・力作に学ぶ」という学習内容であることを示した。また、その具体例を資料2で示した。この学習で学生に配布したテキストの例を資料6として紹介する。この論文の紙数の都合で第一回の、そのまた一部分に留まらざるを得ない。真に残念である。

資料6で省略した部分の「一」は独特の助詞の使い方を用いた描写の面白さ、「二」は季節の変化を表す独特の自然描写の面白さ、「四」は対句反復法による描写の面白さを学習する問と例文が載っている。「三」の「無生物主語」とは、実は私の造語である。単なる擬人法ではなく、普通なら登場人物を主語に据えて受身形で描写してしまいそうなところを、無生物を主語に据えて、あたかもその無生物に意思があるかのように描く手法である。「何が彼女をそうさせたか」という題の映画が昔あったという話を聞いたことがあるが、その手の表現である。

資料6 第一回授業「名作・力作に学ぶ」 夏目漱石「こころ」

一、二 略

三 無生物を主語にした描写は読者の印象に残る。次の傍線部を「私」を主語にした文に直してみよう。

① 強い太陽の光が、目の届くかぎり水と山とを照らしていた。私は自由と歓喜にみちた筋肉を動かして海の中でおどり狂った。先生はまたばかりと手足の運動をやめて仰向けになつたまま波の上に寝た。私もそのまねをした。青空の色がぎりぎりとう目を射るように痛烈な色を私の顔に投げつけた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

② 略

③ 私はややともすると机にもたれて仮寝をした。時にはわざわざ枕さえ出して本式に昼寝をむさぼることもあった。目がさめると、蝉の声を聞いた。うつつから続いているようなその声は、急にやかましく耳の底をかき乱した。私はじっとそれを聞きながら、時に悲しい思いを胸にいだいた。

(それから一か月以上経った九月のはじめ)

私は取り散らした書物の間にすわって、心細そうな父の態度と言葉とを、幾たびかくり返しながらめた。私はその時また蝉の声を聞いた。その声はこのあいだじゅう聞いたのと違って、つくつく法師の声であった。私は夏郷里に帰って、煮えつくような蝉の声の中にじっとすわっていると、へんに悲しい心持ちになることがしばしばあった。私の哀愁はいつもこの虫のはげしい音とともに、心の底にしみ込むように感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かずに、一人で一人を見つめていた。

四 略

表記は角川文庫による

「名作・力作に学ぶ」においては、このようなテキストに盛り込まれた問に対する各学生の見解を述べさせ、適宜指導を加えつつ、今日のレポートに応用したい点を示してゆく。

第一回授業 レポートのお題

以上の学習を経て、授業の最後二十分で学生たちはレポート作成に入る。お題は次のとおりである。

資料7 第一回授業 レポートのお題

お題 私は自動販売機で飲み物を買おうとした。ところが百円玉が自販機の下に転がってしまい、取り出せない。手元には、あと五十円しかない。・・・適宜設定を加えて、この状況と私の心理を描写せよ。

条件①季節感を盛り込むこと。春夏秋冬のどれでも可。

②「私は」「私が」という表現を用いてはならない。主語は無生物にすること。

③文中に対句（あるいは反復）表現を入れ、そこに線を引くこと。

このお題のねらいはいくつかある。

- ① 第一回の授業であり、生まれて初めて小説に挑戦する学生が何人かいるので、初心者でも随想的な感覚で書きやすい「私目線」「一人称目線」の小説として設定してやること。
- ② 漱石の無生物主語の使用や、対句反復表現を模倣させ、表現技

法「レトリックを工夫する姿勢を持たせること。」

- ③ 主人公をピンチに追い込み、彼（彼女）がそれをどう打開するかを描くという小説のストーリーの基本をつかませること。
- ④ ある状況を体験した場合、人間は季節・天気・時間に応じて異なる反応を示す。そこで、心理を描くにあたって、情景描写が大きな役割を果たすことを認識させること。
- ⑤ 経験豊富な「上級者」向けに、学生各自の裁量でストーリーを膨らめられるよう「適宜設定を加え」ることを奨励すること。

このうち①と③に関しては、わざと学生には伏せる。いずれも小説の基礎基本であるとともに、極めて重要な事項なので、いくつかのレポートを経験させ、間違いを起させた後で教えた方が学生たちの身に付くと考えられるからである。

②④⑤のうち、最も力説したのは④である。②は「名作・力作に学ぶ」の項で、「今日のレポートに応用するように」と伝えてあるし、お題の条件②にも示してある。④は条件①に示してはあがるが、「名作・力作に学ぶ」ではそれほど強調していない事項である。ゆえに、お題を読み上げた直後に、「君が瞬間的に想像した季節は春夏秋冬のどれだったかね？」と数名に質問してやる。そして「その季節だったらどんな飲み物を買おうとするのかね？」と問を追加する。その上で、「じゃあ、それを盛り込みなさい。条件①は、そこまでを求めているのだよ」と助言し、「今日のノウハウカード」①を掲示する。

第一回ゆえに与える時間は極力三十分を割らないようにしている。その上で、今回に限り宿題は認めない、書きかけであっても、授業終了時に提出するよう、レポート作成開始前に予告する。

換言すれば、二回目からは授業終了時まで完成できなかった者

は、翌日の午後一時までに研究室に提出するよう指示する。こうすると多い時には半数以上の学生が「宿題」としての作成を選ぶ。出来栄えはともかく、彼らの意欲には敬意を表したい。

第一回授業 お題に対するレポート

では資料7のお題に対する学生のレポートを、資料8として紹介しよう。ここから先は学生Aのレポートが何度も登場する。これは一人の学生が回を重ねるにつれてどの程度創作力が向上していくかを見ていただくためである。

- ちなみに学生Aは、第一回授業のアンケートによると、
- ① 小・中・高校を通して授業で随想・小説を書いた経験「なし」
 - ② 随想や小説を書くことは「まあまあ好き」
 - ③ 小説を書いてコンクールに応募したことは「ない」
- なぜこの学生を選んだかというと、この学生は第一回、第二回のレポート内容から見て、過去五年間でワースト五に入る「書けない学生」であった。しかし、創作意欲は日増しに旺盛となり、過去五年で最も成長した学生だと私が実感したからである。

資料8 学生Aの作品

真上に昇る太陽の光が私の肌を焼きつける。
ふと視界に入るは一台の自動販売機。財布を開けば丁度百五十円。今月最後のお小遣いだ。
迷っている私にすると突然肌にとわりつくような熱風が吹きつける。風が押し、自動販売機が私のお金をすいこんでいく。す

ると再びあの熱風が吹きつけ、百円玉が私の手から転がり落ちた。そのまま逃げるように自販機の下へもぐるではないか。

学生Aが提出したレポートの原文も、わずか七行であった。多くの学生が十行以上書いてくる中で、とりわけ短い。事実、その年度において格段に字数の少ないレポートであった。
しかし小説らしい表現をねらって一生懸命書いていることはお分かりいただけようか。

- ① 自動販売機、百五十円等の体言止めが使われている。
 - ② 焼きつける、吹きつける等の現在形が使われている。
 - ③ もぐるではないか、というように詠嘆表現が使われている。
 - ④ 自動販売機や百円玉を無生物主語として用いている。
 - ⑤ 熱風が熱風がと反復を狙っているらしい。
 - ⑥ 今月最後のお小遣いという設定を追加している。
- 質量ともに物足りないと言ってしまう、それでおしまいです。この授業を担当するには、それを言ってはならない。「十五回目の授業のアンケートで『この授業を取って良かった』と必ず言わせてみせる」といった自負心をメラメラと燃やさなくてはならない。
では具体的にどう指導するのか。うまくやらないと二回目、三回目の授業で逃げられてしまう。現に「履修辞退」という権利が学生たちには与えられている。私が毎年取っている手法は次のとおり。
- ① 無理しても良いところを三点ほど指摘してやる。**注目**と赤ペンで書き入れ、次の授業時に回覧する際、友人の目がそこに集中するようにする。
 - ② 添削の「削」の部分は三箇所ほどに留める。
 - ③ お題の「三条件」をどれだけ達成できたかは、必ず批評として

書き込んでやる。レポート用紙の左側が赤ペンで真っ赤になるほど書き込んで、「先生も真剣だ」と認識させる。

資料9 学生Aに対する添削結果

太陽が真上から私の頭を

——真上に昇る太陽の光が私の肌を焼きつける。

が私の目と脚を吸いつけた。

——ふと視界に入るは十市町の自動販売機。財布を開けば丁度百五十円。今月最後のお小遣いだ。

注目 いきなり無生物主語をねらったのがよい

注目 この設定追加がよい

迷っている私にすると突然肌にとわりつくような熱風が吹きつける。風が押し、自動販売機が私のお金をすいこんでいく。すると再びあの熱風が吹きつけ、百円玉が私の手から転がり落ちた。自動販売機の下に逃げ込んでしまった。そのまま逃げるように自販機の下へもぐるではないか。

条件1 夏の暑さの表現が三箇所。蝉の鳴き声などの聴覚表現

も入れるといいね。真上に昇る太陽なので、「頭を焼きつけてくる」とか、「肩を刺す」とかにするとよい。

条件2 無生物主語が三箇所。「風が吹く」「風が吹きつける」

という表現も、一応は無生物主語だが、あまり効果的ではない、平凡な述語なので、ここを工夫するともっと良くなる。↓「熱風が私の全身に絡みついていた」

条件3 「熱風が吹きつける」が対句・反復かな? 「熱風が、

熱風が」と、少し変化させると面白い対句になるよ。
↓「熱風が吹きつける。熱風がまとわりつく。熱風が絡みつく」

教えたけれど、我慢しなければならぬことは、どの回の授業のどの学生にもある。この学生の場合は、

① せっかく無生物主語を用いたのに、自販機は機械に留まっている。百円玉も「転がり落ちた」という述語では、無生物主語とは言えない。「雨が降る」「風が吹く」といった表現と大差ない。

② 「私」の感情・心理がほとんど伝わって来ない。・・・かろうじて心理を描いた「迷っている」とは何なのか? どの飲み物を買おうかということであろうか。研修会でこのことを話したら、「今月最後の小遣いを使うか、我慢しようかということではないか」という意見をいただいた。いずれにせよ、この迷いをもっと描けば面白い小説になったのに……と惜しまれる。

③ 「私」の性格や日常生活もほとんど伝わって来ない。百円玉を失った私が、どれほどのショックを受け、どう取り戻そうと足掻き、それが不可能だと知った時にどのようなように去っていったのか、多くの学生がそれらを一つでも描いているのに、この学生にはそれが無い。だから「私」のキャラが伝わらない。

「これではだめだ」と添削するのだが、特に「削」を行う箇所は三箇所留めると先に書いた。故に右の三点のようなケースは、次の授業の最初での講評で、「こういう人が何人かいたけれど」……と、一般論の形で指摘することはあるが、個人的に指摘することは極力減らしている。

それでも②③については、「今日のノウハウカード」を用いて遠からず全員に教えることになる。②はカード⑧や⑬、③はカード⑥を掲示した授業で教えることになる。

第一回のお題に対し、他の学生はどうレポートしたか

学生Aが手こずったところを、他の学生たちはどう描いたか。いくつかの例を紹介しよう。いずれもよく描けた部類のものである。

資料10 他の学生の作品例

条件1 季節感の盛り込みに対して

○ 何より暑い。アスファルトから立ちのぼる熱気が、じわじわと歩み寄ってくるのだ。

○ 容赦なく吹き付けた風がいちだんと寒く感じられた。周りは先程よりも夜が満ち、街をネオンが明るく照らしていた。

前者はかげろうのように揺れる空気を視覚と触覚で表現し、夏らしさを出している。「歩み寄ってくる」という無生物に呼応させた述語も効果的である。

後者は対照的な冬の例である。時間帯を夜に設定したのも空気の冷たさをイメージさせる。静岡県らしい晴れ渡って乾燥した夜気が伝わってくる。

条件2 無生物主語を用いることに対して

○ 温かい缶コーヒーが俺を買えと訴えて来た刹那、凍えていた手

から反抗期と思われる百円玉が、あっさりと飛び出し、あろうことか自動販売機の下に引きこもる。

○ 諦めて財布に向き直ると、五十円玉がちよこんと申し訳なさそうにうにるだけだった。

前者は缶コーヒーを受けた「訴える」という述語、及び百円玉を受けた「引きこもる」という述語が、無生物主語の面白さをよく伝えている。

後者は「申し訳なさそうにいる」という述語も面白いが、「ちよこんと」という修飾語も価格の割に大きさの小さい五十円玉らしさを見事に表現している。

条件3 対句反復表現の活用に対して

○ 自販機に体をびったりとくっつけ、手だけをその下に伸ばす。届かない。近くに落ちていた枝を自販機の下に差し込む。届かない。い。

○ 「どうしよう」とつぶやいた声も、自動販売機だけが聞いていた。落した百円玉のありかも、自動販売機だけが知っていた。肩を落とし、うなだれて去る私の背中を、自動販売機だけが見ていた。

前者は「届かない」の反復の間に、百円玉を取り戻そうとする「私の行動がエスカレートしている。ユーモラスであると同時に悲壮感も増しているように伝わってくる。

後者は「自動販売機だけが」を反復して三回述べたところ、手がこんでいる。それを受けた「聞いていた・知っていた・見ていた」の述語は対句である。ただし、「うなだれて去る私の背中を、自動

販売機だけが見ていた」という描写は、独立した語り手のいる三人称小説ならば可能な表現だが、今回のような一人称小説においてはありえない表現である。ミスであるが、あえて指摘はしなかった。

「私」の感情・心理・性格を描けた例

○ 坂道を駆け上がった所にあるキンキンに冷えたコーラ。身体は早く早くとそれを求め、車輪をこぐ足を速めさせた。

○ まあ百円くらい……。そんな気持ちも一瞬あった。ポケットというポケットをあさって、改めて痛感した。五十円しかない。いやいや、もう一回、もう一回……。何度やっても同じだった。

学生 A が「迷っている私」としか描かなかった部分を、こう詳しく描写したらいいんだよと、答に使いたくなるようなレポートが前者である。自販機の数十メートル前から「私」は購入する飲み物を決めている。その冷え具合まで期待しているところがよい。

結末に近い部分の心理がうまく描けたのが後者である。ポケットの多い Gパンでも履いていたのだろうか。高校時代の制服のブレザーを思い出して描いているのだろうか。次々とポケットに手をつっこんで落胆する「私」の動作が目につかぶ。

第二回授業 レポート返却に当たって

授業の最初にレポートを返却し、講評を述べるということは、既に述べた。第二回授業では、「今日のノウハウカード」②「目線固定するな 無生物主語も」を掲示し、無生物を主語としても「太陽が昇った」「風が吹く」といった表現は、我々が日常生活において

よく使う表現であって、創作上の技法としての「無生物主語」とは言えないということを教える。そして、第二回授業のレポートでも、ぜひこの技法を使ってみるように勧める。

第二回授業 レポートのお題

第二回は、レポートに先立ち、堀辰雄の「風立ちぬ」の抜粋を読み、陽射し、雲、風の描写を学習させる。その中には「八ヶ岳の山頂を離れたばかりの日が、南から西にかけて立ち並んでいる山々の上に低く垂れたまま動こうともしないでいる雲の塊りを、見るまに赤あかと赫かせはじめていた。」といった美しい朝焼けの描写などがある。これを受けて、次のようなお題を出した。

資料11 第二回授業 レポートのお題

お題 A子は大学に入学して間もない。ある日、大学からの帰り道、西の空に鮮やかな夕焼けを見つけた。適宜設定を加えて、この状況とA子の心理を描写しなさい。
条件 ①夕焼けを描写すること。②夕焼けを見た場所と交通手段を描くこと。③心理を描くこと。

このお題にもいくつかのねらいがある。

① 最大のねらいは「私」ではなく「A子は」という条件に即応した目線で書けるかどうかを試すことである。学生たちが誰に見せるともなく書いた小説や、大学祭で販売される文集の小説を見ると、学生たちとほぼ等身大の女子学生を主人公「私」として設定

したものが目立つ。中には小説なのか随想なのか判別しにくいものもある。「目線を誰に定めたら効果的な小説になるのか」という感覚が著しく弱く、随想の延長でなんとなく一人称小説に設定してしまふ者が多いのである。このお題は、そういう点で、小説の目線ということにはわざと触れずにおいて、何人もの学生に失敗させておいて、次回の授業で「語り手は誰か 私とは限らない」という「今日のノウハウカード」を掲示するためのものである。

② 午前中の登校時には、学生たちは遅れまいと夢中でやってくる。その時に天気だの陽射しだのに注目している余裕は乏しいであろう。本学のような狭いキャンパスにおいては、昼休みに芝生の広場に腰を下ろして空を見上げるといふ経験もない。帰り道ならば徒歩、自転車、バスいずれの通学方法の者でも、気分的に落ち着いて夕日を眺めることぐらいするだろう。という訳で下校途中に見た夕日を描かせることにした。

③ 条件③に「心理を描くこと」と、ことさらに注文が付けてある。この要求は正確には「夕日を見る前と、見た後との心理の変化を描くこと」と記載すべきところである。わざと曖昧にした意地悪な注文なのである。状況のちょっとした変化で人間の心は変化する。とりわけ小説においては、登場人物の心理がどう変化するかを読者が期待する。長編小説においては進化・成長が期待される。それを見抜いて人物を描けるかが小説の勝負どころだという認識を持たせたい。

第二回授業 お題に対するレポート

では資料11のお題に対する学生Aのレポートを紹介しよう。先に

結論の一端を述べてしまおうが、やはりこの学生も小説の目線ということを作戦として考えたことはなかったようだ。「A子は」と書くべきところを「私は」としてしまっている。また、第二回というところで、学生の負担感をことさらに増やさないよう、授業終了時には書きかけで提出して構わないと指示した。この学生もその指示に従って、未完成で提出している。

資料12

学生Aの作品

改札を出た私は足を南口へと向け歩き出した。駅の北側には商店街を中心とした賑やかな街並み。反対に南側には閑静な住宅が所狭しと建っている。

大学生生活三日目。まだ初めの方だから、あまり難しいことはないだろうと思っていた。甘かった。気を抜けばすぐに置かれる。少しでも緩めば次の瞬間、別の世界へ飛んだ気分である。来週もあると思って気が滅入る。

ふと私の鼻をくすぐるいい匂いがして顔を上げる。つられて私のお腹も鳴る。早く帰ろう。

私の右手に桜の木が見える。ここを右に曲がればすぐだ。今年は開花が遅く、満開の桜。頭の上に何かが乗った。手に取ってみると桜の花びら

資料8のレポートとほぼ同じ三十分前後で書かせたものである。資料8では七行だったのが、今回は十二行に増えている。二回目だから当たり前だと考えてはならない。創作指導者たる者、こんな些細な点をしっかりと評価して学生をその気にさせなくてはいけない

い。

ここでも問題点を指摘する前に評価すべき点について触れておこう。

- ① 一段落、二段落は過去形で書き始め、すぐに現在形に転じて、読者その場に誘い込もうとしている。
- ② 大学生生活三日目など、体言止めを用いている。
- ③ 甘かった、早く帰ろうなどの短文が、文章のテンポを良くしている。「私の考えは甘かった」などとしたらたちまち長ったらしく、説明文調の堅い文章に陥ってしまうところである。
- ④ 第二段落の文にはほとんど主語がない。主語を省いた一見曖昧な文が、実は小説に向いているということが分かっている。

以下、具体的に私がどのように添削したのかを説明しよう。次の文はいずれも話し言葉調だが、実際に書いたものである。

- ① 駅の北側は「街並み」と体言止めしているので、南側も「所狭しと並んでいる閑静な住宅街」などと体言止めにして、対句表現にしよう。
- ② 「早く帰ろう」と五文字で心理を描いたのがよい。短文の効果が出ている。
- ③ 条件①に対して 残念ながら夕焼けを描写する時間がなかったようだね。講評の時に説明するけれど、「時間崩し」というテクニクを身に着けよう。特にAちゃんには人一倍この技が必要だ。
- ④ 条件②に対して 夕焼けを見た場所は分からないが、電車で帰り、最後に歩いて家を目指していることはしっかり伝わってくるよ。
- ⑤ 条件③に対して ここ数日の心理がしっかり描けている。この

心理が夕日を見た瞬間に大きく変化するという作戦だったのかな。そこまで描きたかったね。

- ⑥ A子の話ではなく「私」の話になってしまっている。

せっかく堀辰雄の陽射しの表現を学習したのに、夕日の描写を全く入れずにレポートを提出するとはと、驚かれる人もいるだろう。これを情けないうっかりミスだと解釈される人もいよう。しかし、別の見方もできる。学生たちは高校までに、文章の終了間際にクライマックスとして主題もしくは最も主張したいことを記述する、尾括式の説明文を書くことに習熟してきている。この学生も、桜の花について描写した後に、とっておきの情景として夕日を描こうとしていたのかもしれない。そう仮定して今後の指導の在り方を考えると、学生Aのレポートに添削してやったように「時間崩し」の技を伝授する必要性が増すのである。

時間崩しの技とは

実は学生Aならずとも、このレポートに対して、長々と慣れぬ大學生生活の話を繰り広げ、最後の最後に夕日を発見し、ちょっとさわやかに……と書いてくる学生が多い。ひどいになると、朝家を出発して登校するところから書き始めている。わずか三十分の持ち時間で夕日を発見した時の主人公の心理の変化を描かねばならないという認識が皆無に近い。できごとを時間の流れどおりに書けばよいのだという妄信がある。おそらく小学生時代からの「遠足作文」から抜け出していないのだろうと私は毎年講評している。小説、とりわけ短編小説は時間の流れ通りに書けばよいというものではない。

い。思い切って時間の流れをひっくり返すとよい。時にはクライマックスを真っ先に書いてしまう。この手法を「時間崩し」という。私の造語だが、この趣旨のことは小説の書き方の入門書を読めば、たいていどの本にも書いてあることである。

有名な例を挙げよう。川端康成の「伊豆の踊子」冒頭部である。

資料13 川端康成「伊豆の踊子」冒頭部（抄）

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。（中略）ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。余りに期待がみごとに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだった。（中略）踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。（中略）私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。

表記は新潮文庫による

鴨外も漱石もこの手法を用いている。推理小説の世界はなおのことで激しい。犯人と被害者の人間関係が描かれ、犯行の様子が描かれ、最後に死体が発見されたって何も面白くない。「まず死体を転がせ」これが推理小説の王道である。（余談だが、映画化されて知る人の多い東野圭吾の「容疑者Xの献身」や、往年の名画「刑事コロンボ」シリーズなどでは、早々と犯行現場が描かれてしまうが、これは「ア

リバイ崩し」という手法を取った推理小説だからである。）

ところが悲しいことに我々素人が小説や随想を書くことになると、無邪気に時間の流れ通りに書いてしまうということは珍しいことではないだろう。出来事の描き方としては、決して誤っているわけではない。ただ、効果が薄い、肝心なことを書くこととした時には、時間がない、気力がないということになって損をするという話なのだ。何はともあれ、この手法との邂逅は学生たちにとって目から鱗が落ちるような劇的なものであるらしい。毎年三回目の授業の冒頭で教え、お題説明の中でもう一度教えている。そうすると、多くの学生が生まれ変わったかのように面白い構成のレポートを作成してくる。さらに最終回の授業でアンケートを実施すると、多くの学生が、時間崩しのノウハウを教わったのがよかったと書いてくる。

第三回授業で「時間崩し」を教えるとは……

授業の前半の三十分で、前回のレポートを返却し、講評を述べるということは既に紹介した。第三回授業では、「夕焼けを発見するまでのその日の出来事やA子の心理を時間の流れ通りに書いた者がほとんどだ」と講評する。そして「ごく稀な例だが、夕日を発見した場面を真っ先に書いた人もいる。これはいいアイデアだ。」と言いながら、「今日のノウハウカード」の「時間を崩せ 結果・山場・会話」を掲示する。結果とは最後の場面を真っ先に持つてくること。山場とは、夕日を発見した場面を真っ先に持つてくること。会話とは、例えば夕日を発見したときのA子の独白を真っ先に持つてくること。そう教える。そして、「今日のお題は、二十代のOLが喫茶店で彼氏と待ち合わせしたシーンを出す。思い切って時間を崩して

「ごらん。面白い小説が書けるよ。」と付け加える。

なお、この日の授業の中盤では、川端康成の「伊豆の踊子」「雪国」「古都」を例文として、「雨や雪の描写について学習する。いずれも青年と少女、男と芸者、生き別れになった姉妹の心の通い合いが、せつなくも美しい雨や雪の描写を伴って描かれる名作である。」

資料14 第三回授業 創作レポートのお題

お題 A子は二十代半ばのOLである。スタバで待ち合わせてしばらく彼氏とコーヒーを飲んだ。店を出たら雨。二人とも傘はない。適宜設定を補い、A子の行動・心境を描写せよ。
条件 ①雨の描写を工夫すること。②A子と彼の心理を会話で描くこと。③デートの目的を示すこと。

このお題の意図は次のとおりである。

- ① レポート作成の前に何度も説明した「時間崩し」の技が使えるかどうか。
- ② 「名作・力作に学ぶ」で学んだ、川端康成の雨や雪の描写をヒントに雨の情景描写にチャレンジさせること。
- ③ 第一回、第二回のレポートでは登場人物は原則として一人であったが、今回初めて二人の人物のやりとりを描かせること。
- ④ ③に関連して会話を描かせること。
- ⑤ 第一回、第二回では、学生たち自身と同世代の人間を描けばよかったが、今回初めて、自分がこれから経験する年代の人間を描かせること。特に学生たちと、OLやビジネスマンとでは生活や考え方がどう違うのかを考えさせ、それを創作に活用させること。

⑥ 今回初めて男性を描かせること。

余談であるが、この後、学生たちは、小学三年生の男子とその兄、小学六年の男女、中学生の男女、男子高校生、男子大学生と七十代の祖母、カプルの大学生、四十代の主婦、五十代の主婦、七十五歳の爺さんなど、多彩な年齢で、自分とは異なる性別の人物を主人公にしたレポートを書いてゆくことになる。

さて、時間崩しにチャレンジした結果を公開する。

資料15 学生Aの作品

「傘持ってる？」
「持っていない」
目の前を傘を差した人が通り過ぎる。二人の間に暫しの沈黙。そこに上空で唸っていた雷鳴が割り込んできた。
十分前さ。
「遅い」
A子は椅子に座ったまま、自分に背を向けて立っている男に声をかけた。
男は振り向き彼女を目にすると、
「仕事なんだから仕方ないだろ……」
と言って、あまり悪びれた様子もなく、彼女の向かいの椅子に座った。
とあるビルの一階。テナント部分であるそこにはスターバック

スが入っていた。スタバの上にはA子が勤める会社が数階にわた
り入っている。A子の向かいに座った男はQといい、彼女の同僚
であり、恋人だった。

「仕事といっても、貴方の要領が悪いからでしょ。折角社長がプ
レミアムフライデーを実行してくれたのに……」

A子が少し俯きげに言う。

プレミアムフライデー。政府が月末の金曜日は十五時に業務終
了とし、その後の時間を有効に使い、経済を回そうという政策。
しかし、実行率は5%に満たず、Qと同じような境遇の人は多かっ
た。店内にある時計の針は午後四時を少し回ったところだった。

「悪かったよ。後でこの代金出してやるからレシートよこせ」

「はい、どうぞ」

A子はその台詞を待ってましたというような顔をしてレシート
を渡す。

「そろそろ行くか」

「ん」

A子は残っていた珈琲を一気に飲み干し立ち上がるや、精算を
済ませるQを置いてカツカツと出口に向かった。

そして――

目の前には滝。ではなく大粒の雨。

「昼頃には目眩がするほど晴れてたのになぁ」

「何で傘持っていないの」

「何でかだって？ あれだけ晴れてれば傘なんていらななし、折
り畳みはスーツケースの中。お前も同じだろ」

淡々としたやりとり。

二人の頭上からバタバタ音が響き、地面に跳ねた水が足元を濡

らす。

「止むのを持ってたらバス出るよ。走る？」

資料8では七行、資料12では十二行しか書けなかった学生Aが、
今回は四十二行も書いている。まずこの文字数からして別人のよう
である。もちろん三十分という時間制限の中ではできなかった。本
人自ら宿題として翌日持ってきたものである。例年の「書けない学
生」ワースト一、二位と比べても、驚くべき成長の早さである。

次に内容面を見てみよう。これまた別人のような成長を示してい
る。

① 喫茶店から外に出たら雨が降っていたというシーンから始ま
り、喫茶店内でのやり取りという過去に戻ると、「時間崩し」
がしっかりとできている。また、最後に再び喫茶店から出たシー
ンに戻ることで、現在・過去回想・現在の「額縁小説」の
手法も期せずして獲得している。

② 「雨を描け」と言われると、眼で見た雨しか描けない、つまり
視覚表現しか思いつかない学生が何人かいるのだが、学生Aは雨
に関連して雷鳴を設定することによって、聴覚表現を用いている。
また、それによって後半の「目の前には滝。ではなく大粒の雨。」
という描写が生きてくる。

③ プレミアムフライデーというタイムリーな話題を用いることに
よって、日頃は忙しいビジネスマンとOLの生活を暗示すること
ができた。それによってデートに遅刻してきた彼を責めるA子の
心理と行動が読者に納得できるものとなっている。

④ 第一回レポートから学生Aが意識していた体言止めがここでも
しっかり使われている。特に「目の前には滝。ではなく大粒の

雨。」がユーモラスで、かつ引き締まっている。

- ⑤ 台詞の長短と心理の関係はまだ教えてないのだが、短い台詞、長い台詞を織り交せて多彩な会話を描いている。特に一単語の「遅い」という台詞がリアルだ。

その一方で数々の課題も浮上している。その全てを添削して学生に示すことは困難だが、他の学生もしばしば犯すミスを挙げてみよう。

- ① 冒頭の台詞はどちらが男でどちらが女か分からない。「持ってねえよ」とか「持っていないわ」とすると確定できる。
- ② 中間部は十分前という設定だが、その後の二人の会話からすると、三分しか経過していないように読み取れる。「三分前」と修正するか、彼氏がコーヒーを飲むシーンを入れるとよい。
- ③ 終盤の「何でかだって？」以下の彼氏の台詞が長すぎる。現実の人間は息継ぎの関係でもっと台詞を切る。「あれだけ晴れてたんだぜ。傘なんていらねえだろ。」などと修正するとよい。
- ④ 最後の台詞も発言者が男か女か分からない。また、発言の意味も伝わりにくい。デートの目的地に行くバスが発車してしまうので、遅れないようバス停まで走ろうという意味だと思われる。分割して二人の台詞にするとよい。

添削した箇所

当論文の紙数上限が迫ってきているので、資料9のような、実際のレイアウトに沿った添削結果を示すのは省略する。代わりに箇条書きで示す。

- ① 一〜二行目 「持っていない」↓「持ってるわけねーよ」ここで人物と心理をしっかりと描くとよい。
- ② 四行目 「雷鳴が割り込んだ」この表現うまい 注目
- ③ 七行目 「自分に背を向けて立っている男」男の名を早く仕立てたい。↓「自分に背を向けて立っているQ男」
- ④ 九行目 「男は振り向き彼女を目にすると、」↓「振り返るやQ男は」A子だということはQ男にはすぐ分かったはずなので次の台詞までの時間を短く。
- ⑤ 十行目 「仕方ないだろ……」の「……」まだ何か言いたそうな雰囲気。「……」の効果。
- ⑥ 三十三行目 「そして――」の次。四〜五行目と同様にここも一行空けるとよい。
- ⑦ 三十五行目からの会話 心理状態をもっと示したい。
- ⑧ 三十九行目 「淡々としたりとり」会話の口調から見ると淡々とはしていない。

条件1に対して 全体の分量の割に雨の描写が少ない。今回は雨の描写がポイントなので、もっとたっぷり描くと良かったね。雨がどこに当たっているかによって雨の音も変わる。最後の場面は店のポリ製の屋根だろうか。地面に雨粒が跳ねているから全面屋根付きのアーケードではなさそうだ。雨を音で表現したのは良かった。学習の成果だ。 ↑ 注目

← 注目

条件2 台詞の数から見れば、最もたっぷり描いた方だ。ただし、できれば心理状態をもっと鮮明に読者に伝えるように描きたい。「仕事なんだから……」と「仕事っていても……」の

辺りはいいいね。こんな感じで。

条件3 デートの目的を描き忘れたんじゃないかな？ O Lが金曜

日の仕事帰りに彼氏と行きそうな所を考えて書こう。

他の学生はどうレポートしたか

学生Aに限らず、第三回になると、かなりの学生が面白い表現を用いるようになる。その例を紹介しよう。

資料16 他の学生の作品例

条件1に対して

○ それは突然だった。穏やかな青が灰色に覆われたと思ったら、地面が徐々に水玉模様を描き始めた。一つ二つ、三つ四つ……と増えていき、黒く染まってしまった。

○ 店内の灯りやネオンが自己主張するように光を放ち街を照らす。窓越しにその光を眺めていたA子の目に、パタリと窓に貼りついた雫が映り込む。雫の数は段々に増え、街の自己主張を吸収するかのよういきらめいては跳ねていく。「おや、雨か」

前者は地面に落ちた雨滴、後者は窓ガラスを打つ雨滴を描いている。空から降ってくる雨を描く学生が多い中で、着眼の良さが光る。

条件2に対して

○ 「このぐらいいの雨だったら走っていいけるぜ」
「却下。服濡れるし、風邪引く。あんたがそこで傘買って来て」

A子は百メートルほど先のコンビニを指差した。B夫は「うゑー」と奇声をあげたが、A子が尻を蹴り上げれば、しぶしぶコンビニに走って行った。

○ 「やっと久しぶりに会えると思って楽しみにしてたのに、誰かさんは遅刻して来るし、GWの予定立てるはずが『仕事入ったから無理』って言われちゃうし、雨は降るし、傘はないし——」

「遅刻も仕事のこと謝ったじゃないか」

「せっかく誕生日にももらったピアスしてきたのに気付かないし」「えっ」

「化粧だっていつもより気合入れたのに何も言ってくれないし、そもそもなんか楽しそうじゃなかったじゃない」

「そんなことないよ」

前者はすこぶる勝ち気で彼を尻に敷くタイプの女、後者は怒りをストレートにはぶつけずに、すねて見せる甘え上手な女を描いている。いずれもA子の心理だけでなく、台詞を通してキャラクターを描いたもので、かなり創作に慣れている学生である。

条件3に対して

○ 映画

○ 水族館

○ ショッピング

○ 付き合い始めて三年目の記念日

今日のノウハウ「語り手は誰か 私とは限らない」に対して

- 隣の男を見るが、傘はない。B夫という男は、朝天気予報を見て傘を持ってこようとするような男ではない。
- 店から照れくさそうに出て来る二人組は傘の中で何を話しているのだろう。

主人公の女でもなく、副主人公の男でもなく、第三者のナレーターが天上から見おろして描くように語られている。これを私は「ナレーターコメント」、通称「ナレコメ」と呼び、三人称小説で意識して用いるよう奨励している。

今日のノウハウ「時間を崩せ 結果・山場・会話」に対して――書き出し

- A子とB夫は空を見ていた。灰色の空。水たまりにしずくが落ちてびちょんびちょんと音がする。

○ 「どうするのよ！」

女のかん高い怒号が店の中に響き渡った。店の一角には憤慨した様子の女と平謝りする男がいた。

「悪かったよA子。機嫌直してくれよ」とテーブルに手をついて謝り倒す男。

前者は「さあデートだ。出発。」と店を出たら雨が降っていた、という設定。時間的に最後の場面を最初に持ってくる作戦である。学生Aと同じだ。後者は店内で、遅れて来た彼氏をA子が責める場面。緊迫感のある山場を最初に持ってくる作戦である。余談だが、責める彼女と、平謝りで彼女の機嫌を直そうとする彼氏という設定

は毎年多数を占める。草食系男子の多い時代を反映している。

学生Aはどう成長していったのか

当論文では、この先、学生Aの四つのレポートを紹介する構想であった。彼女は今回紹介したように第三回レポートで大きく成長した。しかし、決してこの先順調に伸びて行ったわけではない。特に第六回レポートでは、サスペンスに挑戦し、最悪と言ってもよいような失敗を犯している。そこでさんざん私に叱られた（もちろんレポート添削内容の上での話である。）後、再び立ち直って成長を続けてくれた。最終回の授業で実施したアンケートでは彼女は次のように述べている。

資料17 学生Aの最終回アンケート回答

- ① 創作にチャレンジしての感想

書いてみたいと思いはするものの、一つの作品として完成することとはほとんどなかったもので、授業で書くことができたのは、とても良い経験だった。オチが難しいです。一つのお題に対しても色々な書き手の作品が読めたのは面白かったです。

- ② 創作力が伸びたかどうか

書き方は少し分かった気がする。ただ、最近読んだ本とかに影響されやすいので、ナレーターの口調とかはかなりブレていると思う。あと、書き始めや一部の場面はパッと出てきてもオチがイマイチ。自創作もオチのつけ方が上手くないかないです。

- ③ その他

書くだけでなく、読むことも出来たので、今後、書く時に気を付けていたことを読む方でも注目しながら読んでいきたい。

毎回のレポートで私も気になっていたのだが、学生Aは作品の締めくくりが稚拙である。宿題として家でじっくり仕上げてきたはずなのに、お題のストーリーが未完成のまま、提出してしまう。どうやら彼女も自覚していたようで、それを「オチが難しい」と表現している。

おわりに

学生Aのレポートを中心として、ほぼ初心者短大一年生がどれほどの創作力を持っているかを紹介し、どういう指導をすればどれほどその力が伸びるのかを示してきた。

ただし、私の指導はストーリー構成、登場人物の描き方、情景描写など、表現のテクニカルな面に特化している。小説の原点は、「作者の内面世界をフィクションに託して描くこと」と私は考えているが、その内面は学生一人ひとり異なるものであり、授業で教えたり助言したりできるものではないからである。

今回論ずることができなかった学生の創作力のその後の向上と、それに関わる指導法については、学生Aの四つのレポートを紹介しつつ、別の機会にぜひ論じたいと考えている。来年度の紀要にその機会が与えられれば、それを活用したい。

参考文献

- 大沢在昌著 「小説講座 売れる作家の全技術」 角川書店
誉田龍一著 「小説を書きたい人の本」 成美堂出版
宮原昭夫著 「増補新版 書く人はここで躓く！」 河出書房新社